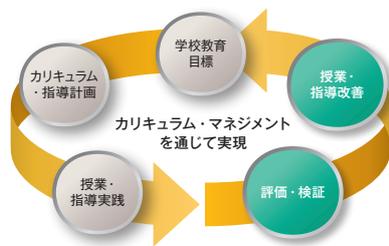


高知県立高知丸の内高校



生徒や他教科とともに授業改善を進め、アセスメントで検証、次年度計画に生かす

高知県立高知丸の内高校は、学科の再編や文部科学省からの研究指定を原動力として授業改善を進めてきた。教科を超えた授業観察を行う「ユニット制」や、生徒と教師が一緒に授業を見直す「授業改善検討委員会」などによって実効性のある取り組みを展開。それらの成果や課題をアセスメントで検証し、次年度の教育目標や活動計画を策定している。

成果と課題を明らかにし、次年度の教育活動方針を策定

高知市の中心部に位置する高知県立高知丸の内高校は、2005年度、現在の単位制普通科と学年制音楽科に再編した。多様な進路志望を持つ生徒が入学し、基礎学力に課題が見られるようになったことから、授業改善に着手。17年度、文部科学省「高校生基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定校となったことを好機と捉え、より実効性のある授業改善を行うべく、18年度、「教育活動方針」を打ち立てた。上岡美保校長は、そのねらい

を次のように語る。

「本校の生徒は素直で、言われたことにはきちんとして取り組み、自己表現や自ら考えて言動に移すことには、課題が見られました。思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度などをより効果的に育むため、『学びは楽しい』のローガンの下、『教育活動方針』として本校の取り組みを可視化させました」

同方針を立てる過程では、前年度までの取り組みについて成果と課題を振り返り、それを基に学校教育目標を設定。その達成に向けた授業改善の取り組みを整理して示した。そして、19年度以降も、前年度の成果

と課題を踏まえて当年度の教育活動方針を立てるPDCAサイクルを回す体制を構築した(図1)。

育成を目指す資質・能力を 明文化し、授業改善

授業改善の核となる多様な取り組みを以下、見ていく。

◎身につけさせたい資質・能力の明文化と共有

全教科共通の「丸の内スタンダード」を基に、各教科が「生徒に身につけさせたい力」と、その達成に向けた具体的な取り組みと評価方法を提示。一覧化して、教師・生徒間

高知県立高知丸の内高校

- ◎高知県最初の女子校として開校以降、一時期の男女共学の時期を経て、長らく女子校として女子教育に尽力。2005年度、普通科を単位制に移行し、共学化。17年度、文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」指定校。
- ◎設立 1887(明治20)年
- ◎形態 全日制/普通科、音楽科/共学
- ◎生徒数 1学年約160人
- ◎2019年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、神戸大、島根大、高知大、高知県立大、高知工科大などに21人が合格。私立大は、明治学院大、京都産業大、近畿大、桃山学院大などに延べ56人が合格。短大、専門学校進学81人。就職9人。
- ◎URL <https://www.kochinet.jp/manuoh/>

で共通認識を持てるようにした(図2)。同校の定期考査では、全教科・科目で、思考力等を問うパフォー

「学校教育デザイン」を描く今と未来



大石由紀
「総合的な探究の時間」担当
おおし・ゆき
教職歴17年。同校に赴任して4年目。理科(生物)。



澤田朝子
さわだ・あさこ
教職歴22年。同校に赴任して7年目。英語科科長



高野佳香
たかの・よしか
教職歴22年。同校に赴任して8年目。国語科。



門田雅仁
かどた・まさひと
教職歴24年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



津野幸司
つの・こうじ
教職歴34年。同校に赴任して1年目。数学科。



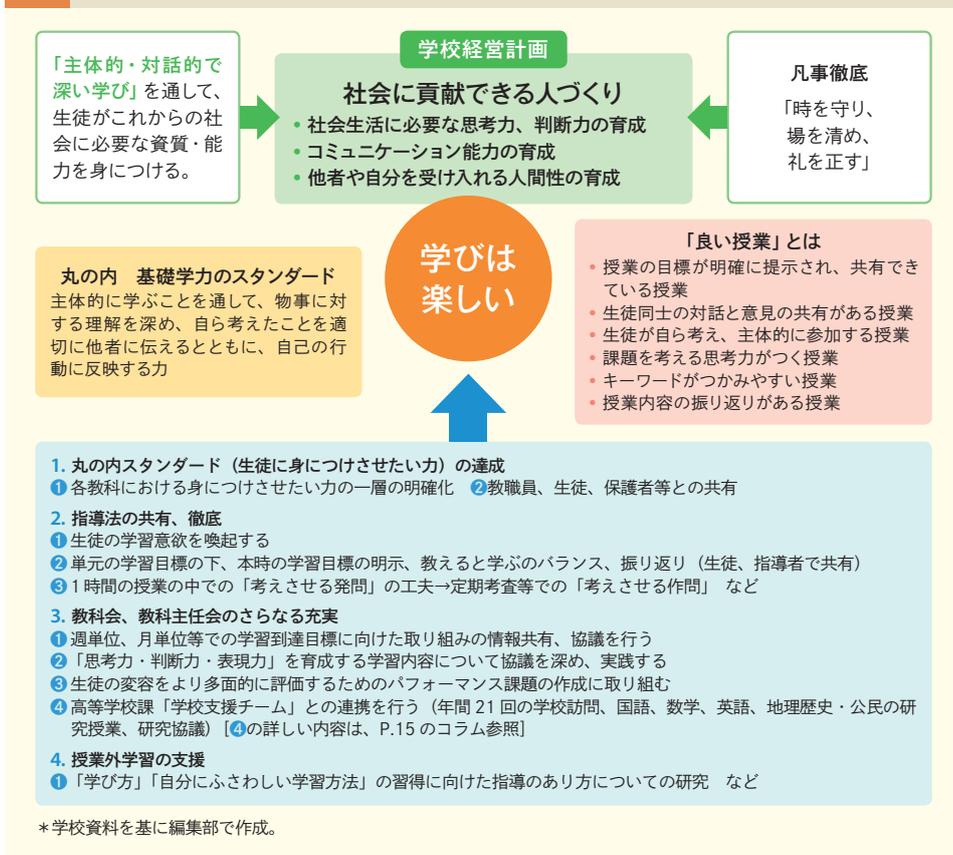
山本由美子
やまもと・ゆみこ
教職歴33年。同校に赴任して2年目。学習指導部長



上岡美保
かみおか・みほ
教職歴34年。同校に赴任して2年目。校長

ンス課題を10点以内の配点で出題している。例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」では、パフォーマンス課題

図1 2019年度の教育活動方針(抜粋)



題1割、記述式問題9割としている。
◎教科会と教科主任会の充実
週1回の教科会では、「生徒に身につけさせたい力」の達成に向けた指導の検討と、思考力・判断力・表現力を問うパフォーマンス課題の研究などを実施。そこでの検討・確定内

容を、月1回の教科主任会で共有し、教科を超えて助言し合う。19年度は、パフォーマンス課題について重点的に研究。教科主任会では実際に出した問題を取り上げ、生徒の解答を踏まえて問題が適切だったかを分析。その結果を職員会議で共有した。

図2 「生徒に身につけさせたい力」国語科の例

令和元年度 「生徒に身につけさせたい力」	令和元年度「具体的取り組み」 (身につけさせたい力をつけるために 日々の授業等で何をやるか)	身につけさせたい力が ついたかどうかを どのように測るか
<ol style="list-style-type: none"> 表現に対する関心を深め、国語の知識や技能を身につけようとする力。 表現内容を的確に理解してまとめ、自分の考えを適切に表現する力。 表現を基に、自ら課題を発見し、自分の考えを適切に表現する力。 	<p>特に「生徒に身につけさせたい力」の①及び②に重点を置いて取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①の力を育むため、副教材及び小テストを適切に活用し、特に「漢字・語彙(語句の意味)」「評論に用いられる語句」の知識の定着を図る。 ②の力を育むため、特に社会とつながりのある単元において、生徒自身が得た知識・情報を整理することを目的とした授業を実践する。 	<p>定期考査のあり方を見直し、「生徒に身につけさせたい力」の①及び②の力の定着度を測るような問題を作成する。①は、複数回の小テストと同範囲の語彙について出題し、定着度を測る。②はテキストの情報を整理し、120字程度まで表現する問いを出題し、情報を正確に捉え、整理し、的確に表現できているかという点に着目する。</p>

*学校資料を基に編集部で作成。

◎教科混合の授業観察「ユニット制」
教科や世代が異なる教師3人が1組となり、相互に授業観察を行うのが「ユニット制」だ。3人のそれぞれ

指導の振り返りを充実させ、次のステップへつなげる

れが授業者となり、本時の授業目標やねらいなどを「授業観察シート」に記入。それを基に授業を参観し、授業後に3人でよかった点や改善点を話し合う。14年度に始め、現在は前・後期に各1回実施している。生物担当の大石由紀先生は、ユニット制で他教科の授業を見て、自身の指導を見直したと語る。

「言葉の概念に関する現代文の授業では、学んだ言葉を用いた文を作成させ、概念を確認させる活動をしていました。生物は専門用語が多く、その概念をどうすれば正確に生徒に伝えられるかが、当時の私の課題でした。そこで、現代文の授業で行われていた活動を、自分の授業にも取り入れることにしました」

学習指導部長で数学科の津野幸司先生は、教科を超えた授業観察が授業改善に効果的だと指摘する。

「教師全員が授業公開をすることで、学校全体の指導力が高まっています。私は、英語の授業を見て、数学の授業でも思考力や表現力を育むためのペアワークを取り入れました」

◎「授業実践レポート」の作成を通じて自身の授業を振り返る

19年度に始めた「授業実践レポ

ト」は、前・後期に各1回、生徒の变容から教師が自身の授業を振り返る取り組みだ。国語科の高野佳香先生は、思考力や表現力の指導力を高めようと小論文の授業を総括した。

「文章力や語彙力に関する生徒の自己評価は、4月時点で5段階評価の2・5でした。そこで、生徒同士で対話し、意見を共有する活動を取り入れたところ、前期の終わりには3・0に上昇しました。1年間、この活動を実施し、生徒の自己評価の変化を見ていきます」

以上のような学校全体で行ってきた様々な取り組みが、教師の授業改善の意識を高めていると、山本由美子教頭は語る。

「本校には、教師が協働して授業を見直そうとする文化が根づいています。普段から職員室の至るところで、指導や教材について話し合っている先生方の姿を見かけます」

生徒と教師が一緒に授業を見直す「授業改善検討委員会」

授業改善には、生徒の声も取り入れている。毎年12月、管理職・分掌長・教科主任・音楽科科長と、各クラス

の代表生徒が参加する「授業改善検討委員会」を実施。生徒と全教師(校内研修扱い)が同じ公開授業を受け、その後、生徒・教師の混合の班で公開授業や日頃の授業について、前年度に同委員会と教科主任会で決めた「良い授業」(P.13 図1)を基準に、よかった点や改善点を議論し、模造紙にまとめて発表する(写真)。「教科書に載っていない解法を考える時間がもっとほしい」「キーワードが多いと、重要事項が分かりづらくなる。絞り込んでもよいのではないか」など、生徒から率直な意見が出された。18年度、公開授業を担当した研究主任の門田雅仁先生はこう振り返る。

「公開授業では、情報を詰め込みすぎてしまい、最後にまとめる時間を十分に取れませんでした。すると、

生徒から『授業の時間配分をきちんとした方がよい』と指摘され、その反省を次に生かそうと強く思いました。一方で、『授業の目標を最初に示していたので、目指すべきことが分かってよかった』といった意見も出され、うれしい思いもしました。生徒から学ぶことは多く、『よい授業をつくっていくのは、教師と生徒』という意識が両者に根づいています」

生徒・教師・保護者で教育活動をデザインしたい

授業改善の成果はアセスメントによる客観的指標で評価していると、英語科科长の澤田朝子先生は語る。

「D3(*)をなくすことを目標にして授業改善を図ってきた結果、19年度には0人となり、中位層が増加しています。そこで、現在は、D層全体の減少を目標としています」

推薦・AO入試で力を発揮する生徒が増えていくと、高野先生は言う。「以前は、志望理由をきちんと書けない、面接でうまく話せないといった生徒が多くなりましたが、自己表現は着実にできるようになっていきます。思考力や表現力は社会で必要と



写真 2019年度の「授業改善検討委員会」には、代表生徒31人が参加。生徒・教師混合の8人が1班となって議論した。各班の発表内容は校内にも掲示し、学校全体で共有している。

* ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「GTZ (学習到達ゾーン)」の評価の1つ。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

「学校教育デザイン」を描く今と未来

される資質・能力であり、生徒の卒業後の活躍を期待しています」

思考力・判断力・表現力の育成に向けては、19年度、1年次の「総合的な探究の時間」に論理力に関する教材を導入した。澤田先生は、「総合的な探究の時間」と教科の授業をつなげる視点の必要性を語る。

「教科の授業で高めてきた思考力・判断力・表現力を、『総合的な探究の時間』で、より汎用的な力として発揮している生徒の姿を目にします。本校は多様な取り組みを重ねてきましたが、改めて横串を通して捉え直すタイミングに来ているのではないのでしょうか」

同校では、学校行事や部活動、校則などについて、教師・生徒・保護者で協議する「ドリームズ・カム・トゥルー懇話会」を年1回実施している。同懇話会を自校の教育活動全体のデザインを構想する場に活用していきたいと、上岡校長は展望を語る。

「本校は既に多様な取り組みを進めています。点と点を結んで線にし、さらに面とするために、PDCAサイクルを回しながら学校教育デザインを描き続け、その実現を図っていきます」

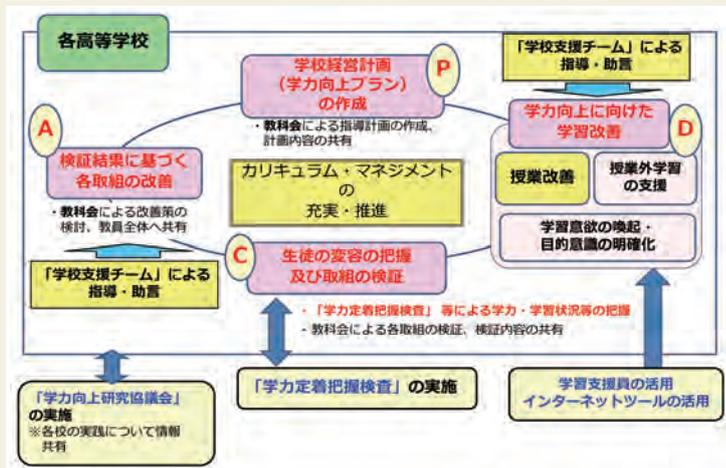
高知県教育委員会高等学校課と連携した授業改善

「学校支援チーム」が定期的に各校を訪問して助言

図3 「学校支援チーム」の年間の活動の流れ



図4 高知県教育委員会が描く授業改善のPDCAサイクル(令和元年度)



高知丸の内高校の授業改善には、高知県教育委員会(以下、県教委)の高等学校課もかかわっている。県教委は、2016年3月、「教育等の振興に関する施策の大綱」を策定。さらにそれを踏まえた「第2期高知県教育振興基本計画」を作成し、「高等学校の学力・社会性向上に向けた取組の徹底」を示した。その目標の一つ

に、「基礎学力の定着に向けた『学校支援チーム』の取組の更なる強化」と「将来に向けて目的を持つことができる生徒育成プランの推進」を挙げた。

PDCAサイクルに基づく教育活動を支援しようと、「学校支援チーム」が県内の各校を定期的に訪れて、授業参観と事後研究協議に参加し、指導・助言を行っている(図3)。対象教科は、

18年度は国語・数学・英語とし、19年度はさらに地理歴史・公民を加えた。高知丸の内高校の場合、18年度は「学校支援チーム」が22回訪問し、授業改善について指導・助言をした。各校は、学校経営計画を作成して、目指すべき姿(P)↓それを実現するための取組(Do)↓学力の向上や社会性の育成等の評価(C)↓自校の教育活動の見直し(A)を記入。さらに、「高校生のための学びの基礎診断」を活用し、取組みの成果を学びの基礎診断のアセスメントを活用して測り、その結果を分析して教育活動の質を一層高めている(図4)。

* 図3・4ともに、高知県教育委員会提供資料を一部改変して掲載。